

24年センター試験実施速報(平均点等「中間発表」)

24年センター試験“基幹3教科”平均点合計(中間集計/600点満点)

**「国語＋数学(I・A＋II・B)＋英語」は、  
11.4点アップの359.8点(得点率60.0%)!**

国語5.7点、数学I・A4.6点、英語2.1点アップ／数学II・B  
1.0点ダウン。新設「倫理、政治・経済」は68.3点の高得点。  
化学Iと物理Iのアップで、理系は“やや強気”出願か!?

旺文社 教育情報センター 24年1月19日

24年センター試験(本試)が1月14日(土)・15日(日)の両日、全国709試験場で実施された。

24年から地理歴史(以下、地歴)、公民、理科の科目選択の弾力化を図るため、地歴と公民の試験枠を統合([地歴・公民])し、理科も3グループ制を廃止して1つの試験枠に統合、それぞれ最大2科目受験を可能とした。しかし、[地歴・公民]試験枠における問題冊子の配付ミス、試験開始時刻の遅れ等が多発し、3,886人が「再試験」対象者になるなど、多大な混乱を招いた。

今回のセンター試験は様々なトラブルに見舞われたが、大学入試センターは1月18日、各科目の平均点等の中間集計を発表。旺文社では当データを基に、基幹3教科である国語、数学(I・A＋II・B)、英語の平均点合計(600点満点)を算出した。国語と数学I・Aの大幅アップ、英語のアップ、数学II・Bのダウンで、23年より11.4点アップの359.8点(得点率60.0%)である。公民の新設科目「倫理、政治・経済」は68.3点の高得点だが、公民では例年、受験生の多い現代社会が大幅ダウン。化学I・物理Iのアップで、理系では“やや強気”出願もみられよう。

### ■ 志願・受験状況

<志願状況：志願者数約55万5,500人で、4年ぶりの減少>

- ① 志願者数、前年より3,447人減：24年センター試験(以下、セ試)の志願者数は、前年比0.6%減の55万5,537人で、4年ぶりの減少。
- ② “現役生”は4年ぶり、“既卒者”は3年ぶりの減少：24年は高卒者数の減少、大学志願率の低下などが見込まれ、現役生は4年ぶりに前年より2,708人(0.6%)減の43万9,713人だった。

一方、既卒者は、3年ぶりに前年より463人(0.4%)減の10万9,748人。なお、高等学校卒業程度認定試験の合格者等の志願者は、前年より276人(4.3%)減の6,067人だった。

#### ③ 志願者減の主な背景：

- 今春の高卒者数は23年より減少が見込まれることに加え、現役生の大学志願率が最近の上昇傾向から、23年は僅かながら下降に転じたと推測され(19年51.8%→20年

53.5%→21年 54.9%→22年 55.7%→23年 55.5%<東日本大震災による未集計の影響から旺文社推定>、この志願率の下降傾向は24年にも引き継がれているとみられる。

- 平成2(1990)年のセ試開始以来、毎年、上昇していたセ試の現役志願率が、初めて前年割れとなった(平成2年 15.0%→23年 41.6%→24年 41.5%)。
- 23年は公立4大学のセ試を利用する分離分割方式への参入がみられたが、24年は公立大の新規参入はない。また、24年は私立大のセ試参加増(9大学 21学部増の 513大学 1,461学部。23年3月末現在)と短大の参加増(2短大増の 165短大。同)はあるものの、参加定員数は私立大で 377人、短大で 20人の増加に留まっている。
- 長引く不況や雇用不安、世界的な金融不安など、先の見えない経済環境の低迷に加え、東日本大震災や原発事故などの影響も少なからず働いているとみられる。

### <受験状況：数学の受験者大幅増。理科の受験率大幅アップ>

第1日目(1月14日)と第2日目(15日)の受験状況は、下表のとおりである。

#### ●《第1日目》(1月14日)

教科等 試験枠	24年受験者数 (受験率)	対前年 増減(人数)	23年受験者数 (受験率)
地歴・公民	455,900人 (82.1%)	—	367,366人 (65.7%)
			325,082人 (58.2%)
国語	502,506人 (90.5%)	▲2,522人	505,028人 (90.3%)
外国語	筆記	132人	520,528人 (93.7%)
	英語リスニング	151人	513,576人 (91.9%)

#### ●《第2日目》(1月15日)

教科等 試験枠	24年受験者数 (受験率)	対前年 増減(人数)	23年受験者数 (受験率)	
理科	382,446人 (68.8%)	—	理科①	211,372人 (37.8%)
			理科②	251,498人 (45.0%)
			理科③	179,372人 (32.1%)
数学	数学①	4,964人	数学①	386,325人 (69.1%)
	数学②	8,384人	数学②	349,908人 (62.6%)

- 注1. 外国語の「筆記」は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語。「リスニング」は英語のみ。
2. 受験者数・受験率は24・23年とも、速報値。
3. 受験率(%)=受験者数÷志願者数×100
4. ▲印は、対前年マイナス。

- 今回から試験枠(理科はグループ制)が改編された地歴、公民、理科を除く、国語、外国語、数学の各試験枠の前年との受験状況を比べてみる。

第1日目の国語はセ試志願者減にほぼ相当する0.5%減、約2,500人減となっている。例年、最も受験者の多い外国語(筆記)の受験者は52万528人(受験率93.7%)、英語のリスニングは51万3,727人(同92.5%)で、前年よりやや増加している。

第2日目の数学は、数学①が約5,000人(前年比1.3%)、数学②が約8,400人(同2.4%)のそれぞれ大幅増である。

- 全体の受験状況としては、第1日目の文系教科に比べて第2日目の理系教科である数学の大幅な受験者増が目立ち、理系志望者の増加がうかがえる。

なお、理科の受験率もアップしているが、これは従来の3グループの試験枠を一つに統合したことによるとみられる。

## <[地歴・公民]の試験実施トラブル>

### ● 「第1解答科目」と「第2解答科目」

冒頭でも触れたが、今回のセ試から従来の試験枠である地歴、公民、及び理科3グループの試験枠をそれぞれ統合し、[地歴・公民]及び[理科]に改編。各試験枠から最大2科目受験を可能とした。トラブルは、第1日目の[地歴・公民]で起きた。

[地歴・公民]及び[理科]で「2科目選択・受験」の場合、最初に解答する科目を「第1解答科目」、次に解答する科目を「第2解答科目」としている。

解答時間は各科目60分であるが、第1と第2の間に10分間の答案回収(第1解答)と解答用紙配付(第2解答)を行うため、試験時間は“130分のぶち抜き”となる。

志望大学のセ試利用が“1科目利用指定”である場合、当該受験生は“本命1科目”に絞って「2科目選択・受験」(2科目試験枠)を「事前登録」し、“本命1科目”の解答に最大2倍近い解答時間(120分程)を掛けることが可能になる。つまり、2科目受験の場合の解答科目の順番は受験者に任されることから、2科目受験者は「第1解答科目」の解答時間(60分)を、「第2解答科目」(本命科目)の解答に充てることもできる。

こうした解答時間の“不公平”を是正する観点から、大学入試センターでは「2科目選択・受験」の場合、志願大学への成績提供について、“1科目利用指定”の場合でも、「第1解答科目」「第2解答科目」それぞれの得点及び合計点を提供して、合否判定には「第1解答科目」の利用を促すなどの是正措置を講じている。また、国公立大でもこうした是正措置を踏まえ、“2科目試験枠”における受験者が“1科目利用指定”の学部等に出願した場合、従来の「高得点科目」による合否判定ではなく、「第1解答科目」の成績利用に変えている。24年の国立大ではもともと地歴、公民、理科を課さない1校と、「高得点利用」の1校を除いた全大学、公立大では半数以上の大学が「第1解答科目」利用である。

### ● [地歴・公民]2科目受験と問題冊子の配付

ところで、[地歴・公民]2科目受験の受験パターンは、①地歴から2科目／②公民から2科目／③「地歴1科目＋公民1科目」の3通りである。問題冊子は「地歴」(6科目収載。B5判・176ページ)と「公民」(4科目収載。B5判・136ページ)の“2分冊”。

因みに、「理科」(6科目収載。B5判・152ページ)は“1冊”である。

また、解答用紙は[地歴・公民]、[理科]とも「第1解答科目」用、「第2解答科目」用にそれぞれ分けられている。

問題冊子の配付ミスは、上記③で多発したようだ。③の場合、「地歴」と「公民」の2冊を同時に配付しなければならないが、「地歴」のみを配付し、途中で「公民」を配付したケースが多かったようだ。その場合、「公民」を「第1解答科目」(本命科目)としていた受験生は、「地歴」(受験生にとって「第2解答科目」)を最初に解答せざるを得ず、“不本意な「第2解答科目」”を合否判定に利用されることになる。試験会場によっては、先に配付された「地歴」の後、遅れて配付された「公民」の解答に途中から切り替えさせる(解答用紙も「第1解答」用に変更)など、特別の措置もとられたようだ。

その場合、途中から追加配付した「公民」の試験時間(60分)を確保したため、「地歴」を「第1解答科目」としていた受験生は、結果として、配付ミスに気づくまでの時間(長い場合で40分以上)が解答時間に延長され、“公平性”が損なわれたケースもあったようだ。

[地歴・公民]の問題冊子の配付ミス(追加配付)は全国81試験場・98試験室の受験生3,462人に及んだ。また、試験開始前20分間の試験実施上の諸注意・説明、問題冊子等の配付、「第1解答」と「第2解答」間の10分間の答案用紙回収・解答用紙配付のそれぞれ時間超過などによる試験開始の遅れなどを含めると、今回の一連のトラブルの影響を受けた受験生は7,515人に上る(1月18日時点)。

#### ● 原因究明と再発防止

上記のような試験実施方法の変更に伴うトラブルのほか、東日本大震災の影響で臨時に設置された試験会場では、英語のリスニング用のICプレーヤーが受験者数分届かず(200台未着)、試験開始が2時間も遅れる事態となった。

ところで、共通1次試験(昭和54<1979>年～平成元<1989>年)・センター試験(平成2年～)の過去30年以上にわたる試験実施で、これほど大きなトラブルは初めてである。

[理科]は問題冊子が“1冊”であったため配付ミスはなかったとみられるが、「第1解答」と「第2解答」間の“10分問題”(答案・解答用紙の回収・配付、トイレ退室等)も含め、今回のトラブルの早急な原因究明と再発防止に向けたきめ細かな対策が求められる。

#### <「追試験」の受験許可状況、「再試験」の対象者数等>

- 「追試験」は、病気や負傷、試験場に向かう途中の事故、その他やむを得ない事由により「本試験」を受験できなかった者を対象者として、東京芸術大と大阪教育大で1月21日(土)・22日(日)に実施される予定である。

受験許可者数は、東京芸術大147人(疾病・負傷144人、事故等3人)、大阪教育大92人(疾病・負傷90人、事故等2人)の合計239人である。

- 「再試験」は、雪・地震等による災害、試験実施上の事故、その他の事情により、「本試験」が所定どおり実施できなかった場合に実施される。実施日は、「追試験」と同じ。

「再試験」対象者は、1月14日の[地歴・公民]の問題冊子の配付ミスで3,462人、その他のトラブルで424人、合計3,886人に及ぶ。試験会場は、原則として「本試験」会場。

#### ■ 科目別平均点等(中間集計：大学入試センター発表、1月18日)

主な科目の前年との平均点差等をみてみよう。

- 平均点がアップした主な科目は、化学Ⅰ(前年「中間集計」値との差。以下、同。+8.4点)、国語(+5.7点)、数学Ⅰ・A(+4.6点)、日本史B(+4.5点)、物理Ⅰ(+4.0点)、地学Ⅰ(+2.8点)、英語(+2.1点。「筆記」+3.0点/「リスニング」-0.4点)など。
- 一方、平均点ダウンの主な科目は、現代社会(-8.9点)、地理B(-2.8点)、倫理(-1.2点)、数学Ⅱ・B(-1.0点)、世界史B(-0.2点)など。

- 24年セ試から地歴、公民、理科における各科目の得点には、前述のように「第1解答」と「第2解答」の得点が混在するため、各科目の平均点の実態が把握しにくい。

そのため、平均点の動向をみる一つの視点として、文系・理系に共通の“基幹3教科”である国語、数学、英語の平均点合計を算出した。

大学入試センターから発表された科目別平均点等の「中間集計」を基に算出した“基幹3教科”平均点合計(600点満点)は、次のとおりである。

○ 国語+数学(数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B)+英語：359.8点

(前年「中間集計」値との差：+11.4点。得点率60.0%)

なお、国公立大受験の動向をみるための参考に、文・理系型受験に共通の“5教科6科目”(国語、地歴・公民<合せて1科目>、数学<①と②の2科目>、理科<合せて1科目>、外国語<合せて1科目>の各加重平均の合計。800点満点)の平均点も算出した。

結果は488.9点(得点率61.1%)で、前年の「中間集計」値より16.0点アップしている。

- 得点調整の対象科目間の平均点較差をみると、地歴：日本史B－世界史B=6.3点／公民：倫理－現代社会=15.4点／理科：地学Ⅰ－生物Ⅰ=5.4点。

得点調整は、対象科目間の平均点較差が20点以上で、それが問題の難易差に基づくものと認められる場合に実施される。現時点では、いずれも20点以内に収まり、得点調整は実施されない模様。実施の有無は1月20日(金)、大学入試センターから発表される予定。

## ■化学Ⅰ、物理Ⅰの平均点アップで、理系志望者は“やや強気”出願か!?

- 大学受験生の90%以上が入学を果たす所謂“大学全入”時代を迎え、大学進学適齢者の50%強が大学に進学する一方で、受験生を取り巻く環境は、東日本大震災や長引く経済不況などで一段と厳しさを増している。

受験生の間では、学費の安い国公立大志向、進学コストを抑えられる地元志向に加え、4年先の就職状況等を見越して、前年に引き続き就職・キャリア形成に有利な資格志向、理系志望の動きが強まっているとみられる。

- こうした動きの中、セ試“基幹教科”の平均点合計アップに加え、化学Ⅰの8.4点の大幅アップと物理Ⅰの4.0点アップにより、理系志望者が“やや強気”出願に走ることも予測される。ただ、出願に際しては、受験した「第1解答科目」「第2解答科目」と志望大学(学部)のセ試利用科目との照合など、十分な出願チェックが必要だ。
- 24年国公立大入試については、その出願を巡って、セ試“基幹教科”や“5教科6科目”の平均点アップによる難関大(学部)も視野に入れた“強気出願”と、厳しい経済状況などによる“浪人回避”との狭間で、逡巡する受験生も少なくないであろう。
- 私立大入試については、受験コストの軽減にもつながるセ試利用入試への出願増、及び併願の絞込みなどが一層顕著になろう。

☆ ☆ ☆

次ページに、「24年センター試験平均点等一覧」(中間集計)を掲載。

## 平成24年度 大学入試センター試験 平均点等一覧(中間集計)

<平成24年1月18日 大学入試センター発表>

教科	科目	平成24年(中間)		平成23年(中間)		平均点 対前年差		
		受験者数	平均点	受験者数	平均点			
<b>基幹3教科 平均点合計(600点満点)</b> 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語(200点換算)】		- (得点率)	<b>359.8</b> 60.0%	- (得点率)	348.4 58.1%	<b>11.4</b>		
国語(200点)		国語		199,608	115.0	219,187	109.2	5.7
地理歴史・公民	地理歴史(100点)	世界史A		679	45.3	942	50.0	▲ 4.7
		世界史B		37,116	62.9	40,141	63.1	▲ 0.2
		日本史A		1,303	49.1	1,910	51.8	▲ 2.7
		日本史B		59,014	69.2	65,245	64.8	4.5
		地理A		1,023	49.0	2,320	53.5	▲ 4.6
		地理B		36,809	63.9	35,191	66.7	▲ 2.8
	公民(100点)	現代社会		30,403	53.5	58,032	62.3	▲ 8.9
		倫理		11,471	68.8	25,037	70.1	▲ 1.2
		政治・経済		20,128	59.8	37,975	60.3	▲ 0.6
		倫理、政治・経済		16,868	68.3	-	-	-
数学	数学①(100点)	数学Ⅰ		2,859	42.2	3,612	45.1	▲ 2.9
		数学Ⅰ・数学A		140,305	70.8	142,811	66.2	4.6
	数学②(100点)	数学Ⅱ		2,694	27.4	2,903	33.4	▲ 6.0
		数学Ⅱ・数学B		124,496	52.9	125,079	53.9	▲ 1.0
		工業数理基礎		10	28.0	5	40.2	▲ 12.2
		簿記・会計		311	41.1	355	47.3	▲ 6.2
		情報関係基礎		145	57.8	188	63.3	▲ 5.5
理科(100点)	理科総合A		3,908	71.2	9,543	58.9	12.3	
	理科総合B		4,376	61.7	6,771	55.2	6.5	
	物理Ⅰ		57,080	68.2	57,847	64.2	4.0	
	化学Ⅰ		79,637	65.8	79,524	57.3	8.4	
	生物Ⅰ		59,239	65.3	63,715	64.6	0.7	
	地学Ⅰ		6,422	70.7	8,822	68.0	2.8	
外国語(200点)	英語	筆記(200点)		207,256	126.5	224,266	123.5	3.0
		リスニング(50点)		198,357	24.9	218,214	25.3	▲ 0.4
		筆+リ(200点換算)		-	121.1	-	119.0	2.1
	ドイツ語		77	152.4	91	143.4	9.0	
	フランス語		87	122.9	120	138.4	▲ 15.6	
	中国語		223	154.5	219	139.0	15.5	
	韓国語		89	148.2	96	146.7	1.5	

### <注>

- ① 英語の平均点(200点)は、「筆記」(200点)＋「リスニング」(50点)の250点満点を200点に圧縮換算。
- ② 大学入試センター発表の科目別平均点は小数第2位の表示だが、旺文社では小数第1位で表示。
- ③ 表中の「平均点対前年差」は、四捨五入の関係で「24年-23年」と一致しない場合もある。  
▲印はダウンを示す。
- ④ 地歴(各B科目間)、公民(「倫理、政治・経済」除く、各科目間)、理科(各Ⅰ科目間)における得点調整は、「倫理」-「現代社会」の15.4点が最大で、実施されない模様。

旺文社 教育情報センター(平成24年1月19日)

